

櫛卷

泉鏡花作

一

松の緑の其の風情で、東京にも名の聞えた、某公園の松の中に、此の優しい、美しい夫人の邸がある。同じ公園で、姿の可い、振の可い、千年百年を経る松が、周囲に多い處から、寫眞に撮った繪葉書の種々な、どれにも其の館の其處此處が、鬱蒼とした木の下蔭に偲ばれる。……雨の中を、後姿で行く婦の、蛇の目の傘の下に、甕の高い屋根が見えたり、雪に裹着てゐんだ、男の袖摺れに、外堀が見えなどする……其のいづれもが松の中に。

さてある中に、あからさまに寫眞に寫つて、廂の上なる枝に懸つて、玄關の屋根へ出窓のやうに成つた二階の硝子障子の、二三枚見えるのがある。窓越に植木が並んで、はら／＼と松の露が墨色に滲んだ状に、影を濃く葉をかさねたのは、夫人が寵愛のベコニヤで、咲いた花は分らぬが、森にも白く、颯

と光線の射した棧に映つて、むら／＼と其の色が倂立つ。此の硝子を奥へ透して、同じ二階の裏窓の外も、雲のやうに靨黷く松の葉、角ある虎、翼ある龍で・・・・ベコニヤの其の影も、金時繪の蝙蝠見るやう。

隙さへあれば、

「ベコちゃん、ベコちゃん。」  
と言つて、葉を撫でたり、花を覗いたり、鉢を置替へたりして、引籠つてばかり、外出嫌ひな人であるから、――これから其の事を爰に記す――  
當日此の公園に於て開かれた、有志婦人會と言ふのが、矢張りベコニヤの鉢の中に立つて居たのに相違ない。

其處へ、仲働風のが来て、

「奥様。」

「あゝ、喜乃かい。」

とまだ外を視めて居る。

喜乃は丸鬘を俯向けながら、小褌を一寸引合はせて、其の階子段の取着きの、廊下から一段低くなる出張りの床に用意した、上草履を足袋に穿いて、ベコニヤの鉢の間をちよこちよこと縫つて背後へ寄つた。が、夫人が灌いだ水だらけなのに、爪立足で、

「もし、奥様。」

「喜乃、まあ御覽な。」

と言ふ。夫人は、ふさ／＼とある髪を無雑作な櫛巻で、細面のきり／＼とした、鼻の如何にも美しいのが、縦縞の藍と紺の銘仙の不斷着に、紺地へ白ですら／＼と細い雨縞のお召の羽織を引掛けた、襟も袖もきちんとしたが、病上りかと思ふまで、華奢に痩せた滑かな膚を這つて、撫肩すつと、褌もする／＼引くばかり。衣紋も何となく寛やかに、何處に乳があるか胸も薄ければ、すらりと高い背も小柄に見え。帯は男ものかと思ふ幅の狭いのを、胸高く、何時も貝口風に結放し。・・・お儀式の時は兎に角、繻珍の丸帯などは柳に掛ける緞帳で霞でなくては、堪へられまい、其の腰の細い事。

片手に大きな如露を提げつゝ、屋根の上へ差出た枝の、松の葉を抓むやうに、白い指を縦棧に、鬢より高く掛けて居た。

「大變な人出ぢやないか。あら、内の垣根の處まで、……・・・・・犇々詰寄せたと云ふ形ね。旗を御覧な、松から松へ、まるで一面の虹だ事！ 水色地に桔梗と云ふのが見えないばかりよ。……・・・あれ、鯨波の聲ぢやないか、わあ／＼言つて、此處に居ても逆上るはねえ。」

と物柔らかな目をニりながら、吻と言ふ呼吸をした。爾時喜乃を見返つた。目の瞼、耳許の薄紅に、色の白いのが尚ほ目立つ。――

青い雨、藍の波の、累り重る松の緑に、打沈めても沈めても、ともすれば、梢にぼつと立騰、人群集の埃を餘所に、梢深き雲の中にゝんだ夫人の姿は、仙家の鶴の趣があつた。

仲働が小さな名刺を。

「此の方が、お目に懸りたいとおつしやいます。」

と据ゑて出す。……其の金の縁の、キラリとするのを受取りながら、

「旦那様はお留守ぢやないか。」

「否、奥様にお逢ひ遊ばしたのでございます。つて。」

「然う、私に、」とうつかりしたやうに言ひながら、島山波子とあるのを見て、一寸眉をひそめたが、

「お一人かい。」

「はあ、」と目を動かして答へたのは、取次いだ名刺の客を、夫人が悦ばない色があるのに、喜乃は安からず思つたのである。

「婦人會の大將、——一騎打の勝負においてだね。」

と莞爾して、其の名刺を、手も撓げに懐中へ入れようとして、フト猶豫ひつゝ、帯の間に軽く挟んで、

「喜乃、」

「は、」

「お通し申して。」

身動きの袂を綺麗に、白い手を蓮葉に上げて、横の壁につけた棚に、水瓶、柄杓、洋鐵の罐、粉薬の大きな壺など、ベコニヤの化粧の室めく・・・姿見も掛けてあり――これにも窓越しの松の枝、今丁度萌葱、黄色、紅、色々の旗が風に翻々と揺れつゝ映る――其の一方の柱の釘へ、力ちりと如露の口を掛けて、斜に姿見の裏の旗を見た。

「どれ、白旗でも捧げませうかね。」

いや、一騎打だの、勝負だの、言はるゝ意は分らぬが、客は大手に迫詰める、夫人はお物見に悠々たりで、取次に大分の手間。喜乃はもの急ぎをした體で、廊下へトンと一段上つて、階子を小走りにつか／＼と下りた。

夫人は俯向いて、藤色の襟に頤をつけて俯目に覗く、・・・其の衣紋の合せ目に、鼻紙にして

は些とうたがはしい、白い端がちらりとあつた。半分引出すと、其は寫眞で。……、

「お孝さん、……一緒においでなさいな。ハイカラさんよ、此處での貴婦人と云ふ方を見せませうね、」

と小兒でもあやす風に、打傾いて優しく云ふ。其の時、忘れたやうに片手を垂れて、片手の指先で壓へて居た、寫眞の端を、密と押して、

「黙つていらつしやい。」と、紅絹の燃え立つ衣の裏へ、長襦袢の友染透く、膚の霞に忍ばせた。

瞳を返して活々と、袖にも裙にも、肩のあたり、棚にも載せたベコニヤの鉢を見て、

「あゝ、皆、おとなしくして居るんですよ。」

「でも花火が揚ると騒ぐんだもの。不可いわ！窓へ出たり、木登りをしたり悪戯をするんぢやありません。可いかい。」

と莞爾々々しながら、鉢の中をばた／＼と上草履の素足で抜ける。床の濡色に葉が映る、緑の影がち／＼と搦んで、爪尖は雪のやう。

雲くもに響ひびいて花火はなびが揚あつた。

それ、言いはぬ事ことではない。いや、手てにおへぬ腕白わんぱくども。今いま窘たじなめられたばかりなのに、ゆら／＼と動揺どうよを造つくつて、あの、しゃくんだ額ひたひで、ベツカツコをするのもあれば、顔かほを長ながくしたのもある・・・もさ／＼と這出はひだしさうに動くのもあれば、背せの伸のびた癖くせに我われ一倍いちばい、渦卷うづまいて突立つゝたつ奴やつ。羊ひつじのやうな蒼あをい面つらで、ベソを搔かいて見みせたのもある。ト花はなはどれも穿よがくれつゝ、揃そろつてクツ／＼と紅あかく笑わらつた。

向むく。  
途端とたんに夫人ふじんが階子はしこの口くちへ、肩かたを沈しづめて、此方こなたを振ふり

ト寂然ひっそりする。

其處そこに足あしがまだあるやうに、上草履うはざうりが床ゆかに残のこつて、櫛卷くしまきが欄干てすりをはづれた。

「急いそぎますから一寸ちよいと。失禮しつれい、此方こちらから。」  
と鷹揚おつやうに、しかし氣きを輕かるう、其處そこに手てを支ついて、恚いかうお通とほり遊あそばせと正面しやうめんを開ひらいて踞居うづくまる、當家たうけの仲なかば



働らに會あ釋しやくして、いきなり、玄關げんくわんわきの枝折戸しをりどを衝つと  
壓おして、常盤樹ときはぎの落葉おちばはら／＼とある庭前にはまきへ、空氣くうき  
草履さうりで貴あなる婦人ふじん。

三

此この日ひの婦人會ふじんくわいの副會長ふくくわいちやう、當地たうちに隨ず一の貴婦人きふじんと  
あるのが、よくせきの事ことなればこそ、自みづから迎むかひに  
出向でむいたのに・・・名刺めいしを見みたら龍宮りうぐうの奥おくから  
なりと、駈出かして出でもすべきを、玄關げんくわんに立たたせて、

手間入れつ、と云ふ意趣もありや！—— 急ぐ、  
と言ふので、枝折戸から庭前へ降つて湧いたやうな  
不意のお入り。喜乃が驚いて、ばた／＼引込んで、  
正直に邸の内を二間三間開閉して、此の縁側へ廻つ  
た時は、最うすつきりとした形で、縁に腰を掛けて  
待つて居た。お太鼓の帯の結び目高く、白襟で、紋  
附なれば羽織なし。金色の三ツ櫛孔雀の如く、赫耀  
たる装也。

で、喜乃が膝を支いた時、波子は美しい脇明の  
處で、黄金時計を、ばちんと見た。……尤も  
此とて頸長く、生際の濃い美人である。

平にお入り、と扱ふが、矢張り急ぐと、斷切る  
ので、是非なく其處へ友禅の座蒲團を直した處へ、  
ベコニヤの母様、當館の夫人が、今まで抱附いてど  
も遊んで居て、一寸座を立つて復返つたものゝ如く、  
繕はない、隔てのない風采をして、すぐに障子の敷  
居から縁へ掛けて、世體構はず、崩れたやうに膝を  
支いたが、備はつた、優容さは、羽織の雨緋の細い  
袖が、しつとりと落ちて物靜か。

松風も聞えたり。

公園の林の中を、廣くも取らぬ圍の外、板塀の腰を透いて、其處に淺黄のふきの太い、薄ぺらな小紋縮緬、蕎麥切色と云ふ、ずんぐりした膝を、くわつとはだけた唐縮緬で、地に敷いた大きな紋ある、萌葱の風呂敷の上へ載せて、あらう事か、竹の皮包みの握飯を引握んで掻食ふ、・・・圖抜け一番と云ふ圓鬚の陣笠首が、且つ、むしやりながら、且つ塀腰から覗き上げる。――殊勝とも。さて悲惨なとも。襟の其の何やら、徽章さへ、つい鼻の前に見ゆる淺間な庭も、其の松の風、何となく、算の音も響くかと、夫人の姿は、緑に奥深な氣勢であつた。

まつすぐに、両手を前へ、ひれ伏すやうに、櫛巻を指に着けて、

「これは、入らつしやいまし、」  
「は、」

と胸を捻ぢて横を向いた。席をば拂ふが如くに、膝の上へ開いて掛けた、薄紅の手巾をぢつと握る手

に、汗もするよと見えたのが、其の謹ましやかな挨拶を、じろりと一目。する／＼と、手巾も解けて莞爾して、手を力なく横ざまに、帯を、迂らして、縁に支いて、

「御不沙汰いたしましたのね。」

此處で應對をしたと云ふ。此の縁側の處も、  
・・・向うに廻縁の長い、御殿風な廊下を見渡した  
なり寫眞に映つた繪端書の、其も一枚ある。

が、尤も夫人の家構を、恚うして坊間に鬨ぐのではない。此の公園の名木の一ツに數へて、由緒は知らぬが、ト先づ釣合ひを見計らふと凡そ五抱六抱はあらう、老松の見事な幹に注連を張つたのが、縁前に、やがて障子を六七枚、連なる二座敷が半を蔽うて、屋根の上まで小枝一ツ打たないのがある、ペコニヤの葉を透して、雲の簇がる影は、千早振る此の松の緑であらう。然う言へば、傘さしたのも、蓑着たのも、雨に雪にイんだ人の姿は、どれも皆、是なる梢を視めるらしい。

丁度二人の居た處が、其の位置を計ると、ペコニヤの二階の出窓を、左へはづれた處に當る。

更めて言ふまでもなく、波子は、婦人會に列すべく、當家のを強ひてもとて、長刀小脇に挿込んだりで、一騎打に取つて組む意氣込みで來たのであつた。

が、結び髪姿を見ても、はじめから出ぬつもりで居たのは分る。あんなに手紙で懇に招待さして置きながら、と有志でも慈善でも、國家の爲めでも、髪から婦は心付いて、一度和らいだ氣も苛つ。

「前刻から、いや病氣だの、何の彼のと、種々な遁げを張る。――見た處、一枚着替へて敷居を跨げない容子ではない。敷居も愚かで、些と廣い庭を、其こそ石燈籠見に出ると思へば、會場は宛然築山の上にあると云つても可いものを……と、其の氣で氣色ばんでからなのであるから、例の白旗で、唯もう此方は平あやまりなるにも係はらず、言葉葉たゝかひ、やゝ半時！」

四

「唯今——奥様、何うもお留守番をおさせ  
申しまして済みません。」

と人ごみに逆上せた色で、喜乃は莞爾やかな顔を  
上げた。

「お瀧さんはまだ歸りませんのでございますが、  
私もまあ可い氣なものですけれど……あの人も。」

と言ふ。山家の在から奉公に来て居る、其の瀧な  
る飯炊は、婦人會の花火の音で、氣も宙天に上つた  
様子だつたので、夫人が正午前から出して遣つたの  
が、彼これ三時さがりに成つて、後の鴈が恚うして  
戻つたのに、攫はれたやうに歸らぬのである。

「早かつたわね、まだゆつくりで可かつたんで  
すよ。」

夫人は、あの廊下を、母屋から橋一ツ渡り越  
す……離座敷の四疊半に、松影の、晝の月か  
と見る閑靜な丸窓の下に、小机に向つて居たのが振

返つた。唯見ると、何故か目が潤んで、聲も常ならず曇つて居た。

「が、少い女の、人の酔に耳も赤く、顔も汗ばんだ喜乃は、目が近霞の茫として、何の氣も着かぬらしく、

「否、遅くなりましてご置きます、奥様。」  
と敷居の内へ、むつくとした膝を入れる。

「あゝ、おもしろかつたかい。」

「唯、否、別に面白い事もございませんけれど、大變な人でございますの。而して、あの今しがた、前刻お見えになりました、奥様と喧嘩をなさいました、あの方が、何なんでしょう。」

「何うしたの、」  
と物靜に・・・夫人は何か疲れた體で、其の机に袖を凭たすと、手にした鋏が膝へ落ちて、ころ／＼と鈴が鳴つた。

「喧嘩なんかしやしないよ、お前人聞きが悪い事。」

「 貴女がなさりはしません、先方の方でござ  
います。 . . . . 何うの、憊うのツて理屈を云つ  
て極込むやうに突懸つて来るんですもの、お茶のお  
給仕に出ました時なぞ、立身あがりになつて居  
て。 . . . . 私 は凝と顔を見詰めて遣りました、  
眞個に憎らうございましたよ。」

「 だつて極めつけもしようぢやないか。此方が  
悪いんだもの。向う様は眞劍だのに。 . . . 病氣が  
申譯に立たないと成ると、ペコちゃんがり寂しがりま  
すさ。ペコニヤはお前、草花でせう。 . . . 植  
木が寂しがると何のつて、馬鹿にして居ると思ふんだ  
わ。人のために、慈善の會に出るツて迎に來た人だ  
ものね . . . . .」

漸と眞個の事を云ふかと思へば、東京から、私が  
姉妹のやうにして居るお友達が、七八年ぶりで遙々、  
こんな日本の果の國まで逢ひに來てくれました。其  
が、今朝着いたばかり。と最う . . . . . 旅馴れな  
い、氣の弱い、心細い人ですから、來なり早々、留  
守をさしては氣の毒です、と然う言つたとお思ひ。



お前まへも聞きいて居ゐたんだわね。

島山しまやまの奥おくさんが、お友達ともだち? . . . 其それはまあお珍めづらしい、嘸さぞあなたと學校がくかうも同じおなにお出でなさいました方かたでせう。 . . . 東京とうきやうから、と承うけたまはれば願ねがうてもない事ことです。 . . . 御出席ごしゆつせき下くだされば、會くわいの光榮くわうえいでございませう。是非ぜひ御一緒ごしよに、と云いふんだもの。

—— 私わたし困こまツちやつた。」

とあどけないもの言いひをして、緊しまつた口許くちもとを一ちよつと寸すんゆがめて、打微笑うちほゝゑみ、

「何どういたしまして、婦人會ふじんくわいへ出でられさうな方かたぢやないんですよ。 . . . 黒繻子くろじゆすの帶おびも、胸むねに狭せまう疊たぐまつて、襟眞えりしんも出でないばかり、味噌みそ漉こを提さげないまでの姿すがたで居ゐますから ——

否いへ、何どうして奥おくさん、 . . . 貴女あなたのお目めになんて掛かれますものですから . . . 然さう言いつたらさ。

私わたしの様やう子すが様やう子すだから、先方さきさま様さまも意地いぢになつて、

是非御紹介を、一寸でも是非と言ふもの。 (はい)

と云つて、私。 . . . .

「 えゝ、奥様。

(はい。) と貴女、お可愛らしい、お嬢様のや

うなお聲でおつしやいましてすねえ。 . . . . 私、

あの、失禮とは存じましたけれど、お縁先でのお話

でございますし、其に、喧嘩を遊ばしたら、いきな

りあの方を突飛ばして遣らうと存じまして、障子の

蔭に見て居りましたの。」

五

「あんな事を言つて、喜乃、何、可愛らしいものかね、お前お辭儀だつて、先方様の御意見が、頭の上を通越すためにするんだもの、……飛んだお嬢さん。」

而して、懷中から、あの寫眞を出して、と云ふ、其の寫眞は、こゝに丸窓の緑に霞む明りをうけて、机の上に置かれたのである。

其を、凝と、懷かしさうに又見ながら、  
「此處に參つて居りますツて、言つたんだもの。」

東京からだの、遙々だの、留守をさしちや悪いのと、眞面目に私が言つたんでせう……又私眞面目なんだけれど、――ペコちゃんとは違つてお友達だつて言ふんだから、眞個にお客が來なすつたとばかり思つて居る處へ、寫眞だもの。島山の奥さんだつて、そりや怒るわ！

又顔色が變つた處へ、

（こんな服装でも出席が出来ませうか。） つて  
私、言つて遣つた。

（失禮な、何の會だと思ひです。白襟、紋付で  
なくつては會場へは入れません。何です？ 失敬  
な。）

とツンと立つて、ぶん／＼怒つて、袂を拂つて、  
と云ふのはあれよ。．．．．．堀の穴から、透見を  
して居た、目かづらのやうな婦人會連の顔が吃驚し  
て引込んだわね。まあ、

と投げたやうに笑ひながら、心付いた體で、缺を  
拾つて、何をするのか一缺、色よき切へぶつりと入  
れる。机の上は、普賢櫻の葉ながら花が亂れ敷いた  
風情に、絹と縮緬が細に散つて、絲卷の上へ筆のさ  
やで、覺束なさうに、そくひを煉りかけたのが交つ  
て見える。．．．．．先刻から廣い邸に、一人で  
留守居の徒然に、千代紙の切抜か、押繪でもするら  
しい様子なのが、今、切つた切の寸法を、ト菱形に、  
鶴を折る手つきで、撓めて見て、

「而して、あの方が何うかおしなのかい、喜

乃。  
」

喜乃は讀めない顔をして、机の上を覗いて居たが、  
恚う呼ばれて、少し退つて、

「はい、あの何でございます。．．．會の式  
場ツて申しますんでございますか、天幕だの段々の  
幕だの張詰めました、眞中の高い、――あの青々と  
木の葉で包んで、紅白の薔薇で、大きく婦人會と  
飾りつけがしてございます。――其の高い臺  
の上へお乗んなすつて、懷中から、何か、紙へ書い  
たものをお出しに成つて、恚う、あの、御上使御入  
りつてた形で、お讀みなさいましたんでございます。

私どもは、遠くから拝見したのでございますが、  
立つておいでなさいます、お頭の上は、今日の蒼空  
でございます。．．．それに、あの、些とお  
天氣模様が變りさうな處でございますものですから、  
鼠色の雲だの、眞黒なものもむら／＼と、そしてあの、  
日がぱつと當りますので、皆松林の色が照返して、  
空へ映つて、雲が艶々と光ります。――下に  
は矢張り、同じやうな美しい蝙蝠傘が充滿で。それ

が、殿方の海鼠の形の帽子に交つて、驟雨の前の海  
見たやうに、どよんで動くのでございます。

あの、奥様が、然うやつてお読みなさいました  
のを、そろ／＼と巻き返して、おたゞみに成ります  
拍子に、花火が揚つて、まあ！ 何處で放しました  
んでございませう・・・白い鳩が十五六羽、五  
色の旗を銜へましたのが、輪を造つて、空を舞ひま  
してございますの。」  
と一息に言ひ續ける。

「然う。」  
と靜に、細く割つた筆のさやで、そくひを取つて  
切につけて、  
「それから、大神樂がはじまつたんだわね。テ  
トトロ、テトトロツて遠くで音がする、雨氣を持つ  
たやうに・・・一寸、曇りはしなくつて、」

と手元も暗し、丸窓を衝と開けると、青い明が沈  
んで入つた。而して、床柱が光つたが、別に外を見  
るでもなしに、も一ツかチリと鉄を入れて、花片の

やうに切一枚。

「面白さうな音だわね。」

「奥様、何を遊ばします。」と此の時フト見  
付けた喜乃は、色が變つて聲が震へた。

前刻、あゝはおつしやつても、  
賑かさに誘はれて、つい忍んでも出て見る氣におな  
りなすつたのであらうと思ふ。  
自分の歸りの遅かつたのを恐縮した。  
處にお召更へが一揃。





んだよ。」

と莞爾したが、差俯向いて、密と其の切を寫眞の袖へ、軽く小指で壓しながら、

「此の人に、着せるんだわ。」

と向直ると、又鋏を構へて、件の小袖をするりと引くのを、浮膝に手を擧げて、喜乃は思はず此方へ控へた、其の片袖を戦く手に、  
「  
「  
と、動くやうに、縞縮緬は揺いだのである。」

「まあ、奥様、あなた。」

「喜乃。」

と懐かしく、優しい聲で、

「此の着物はね、  
「お前たちにも、別に話はしなかつたけれどもね、私が、此のね、寫眞の人に送つたの。一度送つたのを、折返して、すぐに小包で返して来て、眞に心にかけて下すつて嬉しけれど、  
「お身體がお弱いのを心配して居る身には、何か、おかたみにでもなるやうで、心細い。  
「返すのではありません。いつまでも御一緒に居ると思つて、  
「私の手許に預

つて置くやうにつて、口上がきが入つて居た。其の  
ふみの入つた下に、丁度、あの、此の長襦袢の袖の  
端へ、しつけを取つた其の絲で、―― かう ――  
と御自分の名が縫つてあつたの。

一 昨年をの今時いま分ぶんよ。 . . . 私わたしはね、此この方かた  
とは、其その前まへの年としの霜月しもつき頃ころに、一度ひと逢あつたばかりな  
の。

お前まへたちも知しつてるわね、私わたしが何時いつでも読よんで  
居ある本ほんがあるわ、 . . . 矢張やっぱりね、あゝ言いふも  
のをお書かきに成なる方かたの、此これは奥おくさんなんです。

私わたしは其その御主人ごしゆじんが鼻屑ひいきでね、 . . . 一ひと度ど逢あ  
ひたい逢あひたい、と思おもひながら、まあ、殿方とのがたと女をんなだ  
から、遠慮えんりよをして居ある内うちに、家うちで東京とうきやうを引拂ひきはらつて、  
此地こちへ來くる事ことに成なつたんだよ。

然さうすりや間あひだに海うみがあるし、又またいつ逢あへるかも  
知しれない、と思おもつたから、主人しゆじんに頼たのんで、可いい、と  
云いふから、 . . . 其その頃ころはね、病氣びやうきで、ソレ此こ

處等でも、新派の芝居だとよく舞臺に出る、  
・あの磯と云ふ海岸へ、  
ふけれど、行つて見る、と、  
悪いけれど、其はお察し申すやうな、  
の一室を借りたお暮しなの。

御主人は床に就いて居なすつた。

結び髪で前垂掛の此の奥さんと、二人づれで、海  
岸へ行つたつげが、最う冬近で海が荒いから、紫色  
の凄<sup>すこ</sup>い巖<sup>いは</sup>と、唯<sup>たゞ</sup>眞<sup>ま</sup>白<sup>しろ</sup>な浪<sup>なみ</sup>を見<sup>み</sup>ながら、砂<sup>すな</sup>山<sup>やま</sup>を歩<sup>ある</sup>行<sup>い</sup>  
たの。誰<sup>たれ</sup>も、漁<sup>れいし</sup>師<sup>し</sup>も居<sup>あ</sup>なかつた。唯<sup>たゞ</sup>二人  
で、寂<sup>さび</sup>しく残<sup>のこ</sup>つて薄<sup>うす</sup>色<sup>いろ</sup>な、觸<sup>さは</sup>ると消<sup>き</sup>えさうな常<sup>とこなつ</sup>夏<sup>つ</sup>  
花<sup>はな</sup>と、紺<sup>こん</sup>青<sup>じやう</sup>とも緑<sup>りよく</sup>青<sup>しやう</sup>とも海<sup>うみ</sup>の夕<sup>ゆ</sup>日<sup>ひ</sup>も蒼<sup>あせ</sup>く映<sup>うつ</sup>る、お  
れ咲<sup>さき</sup>の龍<sup>りん</sup>膽<sup>だう</sup>と、一<sup>さくら</sup>つは露<sup>つゆ</sup>に櫻<sup>び</sup>貝<sup>がひ</sup>、一<sup>しも</sup>つは霜<sup>しも</sup>に東<sup>とう</sup>海<sup>かい</sup>夫<sup>ふ</sup>  
人<sup>ん</sup>にもなりさうな、草<sup>くさ</sup>を摘<sup>つ</sup>んでね、  
を土<sup>みやげ</sup>産<sup>げ</sup>に歸<sup>かへ</sup>つたわ！

分<sup>わか</sup>れる時<sup>とき</sup>は夜<sup>よる</sup>だつた。汽<sup>き</sup>車<sup>しや</sup>の窓<sup>まど</sup>へ手<sup>て</sup>を掛<sup>か</sup>けると、  
月<sup>つき</sup>があつた、其<sup>そ</sup>の影<sup>かげ</sup>には、指<sup>ゆび</sup>に簞<sup>は</sup>めた、指<sup>ゆび</sup>環<sup>わ</sup>より、  
常<sup>とこなつ</sup>夏<sup>つ</sup>が霜<sup>しも</sup>に輝<sup>かが</sup>いたんだよ、

寒い時候で、よく保つてね、氷の中へかこつたやうに、其の常夏と龍膽は、此地へ來てからもまだ活々として居た事！・・・と、もの懐かしげに恍惚と、夫人は四邊を見ながら言つた。

「土地が性に合はぬかして、此地へ來てから煩ひ通し。・・・一しきりは半年あまりも、一日おきに熱が出て、つい氣不性で、ね、月に二三度は缺かさな、たよりをしなかつたお詫かた／＼拵へて送つたんです。

然う言つて返して來たのを、預つて置いたんだからね、・・・今朝、丁度、漸とねだつた寫眞が來たし・・・何も、あの人の言ふ事ぐらゐに、拗ねるも、曲るもないけれど、一寸着せて見たくなつたもの・・・御覽な、薄手な方だから、銀杏返によく肖合ふ、其の常夏から思ひついた、水色の縮緬へ、朱鷺色の模様がよく肖合る・・・野暮な私の見立ては何う？

妹のやうに可愛いが、年紀は此の方が姉さんよ。

何處どこに身體からだがあるんです、―― 苦勞くらうをするから瘦やせたわねえ。」

と忘わすれたやうに小袖こそでを落おとして、凝ぢつと見み詰つめた長襦ながじゆ袢ばんは、嫋なよ／＼々と背せを細ほそく、夫人ふじんの膝ひざにうつむけに乘のりぬ。

「あゝ、一度ひと、一しよ緒じよに寝ねて見みたい。」  
と掛かけた羽織はおりの黒くろいのも、緑みどりに映うつる松まつの窓まどに、白しろくかゝつて颯さつと、雨あめ。

「あれ、お寫眞しやしんが濡ぬれます。」  
と最もう納得なつとくした喜き乃のは、慌あわたゞしく障子しやうじをしめた。一い際きは色いろ添そふ長襦ながじゆばん袢ばんの、其その常夏とこなつは咲さいたやう……

恚かう云いふ時ときは、ペコニヤの葉はが活いきて、童わいのやうに立戦たちそよぐ……  
戸外おもての騒動さうどうは、俄雨にはかあめに、夥おびたゞしい婦人ふじん連れんが、色いろの蜘蛛くも手に驅廻かけまはる。

當家たうけの堀際へいぎは、門もんの前まへでも、いや、羽織はおりを脱ぬぐ、簪かんざしを抜ぬく、帯おびを解とくやら、しめるやら、手拭てぬぐひを被かぶると見みると、裾すそをくるりの、背中せなかへ風呂敷ふうろしき敷敷。

雨は次第に風も添へば、堪りかねたものと見えて、  
黄なる禪引だしの、切髪の厭味な後家、現代にこれ  
を未亡人と名づくる、婦人會には招牌の有志家を眞  
前に、どや／＼と當邸へ雨宿りに雪崩込む。門の際  
へ、背後を突抜け、衝と立つたのは島山夫人で。

もつれ髪がみの濡れたのが、ひた／＼と頬にかゝつ  
て、唇も燃ゆる意氣烈しく、

「此家へ入つちや不可ません、不可いんですよ、  
不可いんですよ。皆様、後で言ひます、濡れて下さ  
い、後生だから濡れて下さい、入らないで下さい  
よ。」

と高くかざして居た深張の薄お納戸の蝙蝠傘を、  
引絞つて故と窄めた。黒髪に風を孕み、紅玉の面を  
雫に洗つて、下棲亂れた裾模様の、松の下の細流に、  
ずる／＼と引くのも厭はず、燃立つ蹴出しの緋縮緬。  
爪尖に血を流すまで、決意を示して支へたが、聞か  
ばこそ、留まらばこそ、さあ、恚うなると、何の貴  
婦人も、慈善の雨より、晴着の袖で。

玄關下はまだな事、木戸を突開け、庭から濡縁。  
やがて總勢五六十人、無斷で座敷へ流れ込むのを、

のび上つて凝と見つゝ、毛筋を頬に引詰めて、唇に  
噛んだと思ふと、蝙蝠傘を芝に投げて、門の柱には  
たと凭れて、俯向いた目に衝と涙。・・・  
錦の帯も人波に揉まれた餘残に、ずる／＼と、  
の中に解けて居た。あゝ、此の人も美しい。

【完】